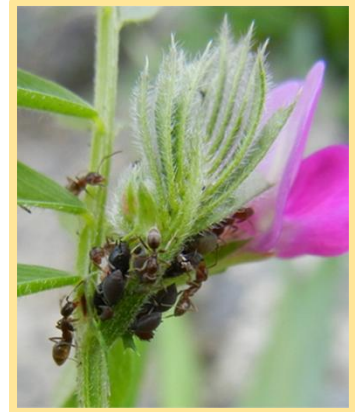


外来生物対策事例集

～京都府地域と連携した外来生物対策推進事業～



令和8年3月

京都府総合政策環境部自然環境保全課

目次

はじめに	2
1 本事業・本事例集について	
(1) 京都府地域と連携した外来生物対策推進事業について	3
(2) 本事例集の構成について	5
2 各事例紹介	
(1) アカミミガメ	6
事例 1 : 八幡市	7
事例 2 : 京都市	8
事例 3 : 福知山市	9
(2) アメリカザリガニ	11
事例 4 : 京田辺市	12
事例 5 : 木津川市	13
(3) アルゼンチンアリ	16
事例 6 : 京都市	17
(4) オオキンケイギク	19
事例 7 : 京丹後市	20
(5) オオハンゴンソウ	21
事例 8 : 京都市	22
(6) オオバナミズキンバイ	23
事例 9 : 京都市	24
(7) ブルーギル	26
事例 10 : 京都市	27
3 参考文献	29

はじめに

平成 17 年 6 月、環境省により「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（以下、外来生物法）が施行されました。近年、人為により意図的、非意図的に持ち込まれた外来生物による在来生物への食害や競合等による生態系基盤の損壊、交雑による遺伝的攪乱、病気や寄生虫の媒介等、生態系や農林水産業等に被害を及ぼしている事例が多数生じています。その対策のための法制度を確立することについて社会的要請が高まってきたことが、同法制定の契機となりました。

外来生物法では、海外から導入され、生態系等に係る被害¹を及ぼす、またはそのおそれがあるものを「特定外来生物」に指定し、飼養、栽培、保管、運搬、輸入、譲渡等の取扱いを原則禁止しています。また、国等による防除の推進や、未判定外来生物の輸入制限などの措置も定められました。

令和 7 年度現在、162 種が特定外来生物に指定されており、京都府内でも 25 種が定着していると報告されています（京都府外来種データブック [2020]）。京都府では、これらへの対策として、平成 30 年 5 月に「侵入特定外来生物バスターズ」を設立し、特に生態系、人体または経済への被害が大きいヒアリ、オオバナミズキンバイ、クビアカツヤカミキリの 3 種を対象に、早期発見・早期防除の体制整備を進めてきました。

その後、グローバル化による人や物資の移動の増加に伴い、ヒアリなど緊急対処が必要な外来生物の侵入事例が全国的に増加したこと、また広く一般に飼育されている外来生物への対策強化が求められたことから、外来生物法は令和 5 年 4 月に改正されました。改正法では、国内に既に定着している特定外来生物による被害防止について、都道府県が対策を講じる責務を負うとともに、市町村も防除に努めることが規定されました。

このため京都府では、令和 5 年度から「京都府地域と連携した外来生物対策推進事業」を開始しました。本事業では、外来生物の侵入・定着が認められる地域や被害発生地域において、地域自らが持続的に対策に取り組めるよう、市町村職員や施設管理者、地域住民等を対象に、防除ノウハウや正しい知識を習得していただく講習会を実施しています。また、外来種の特徴や影響を分かりやすくまとめた「きょうとの外来種ハンドブック」や、早期発見・早期防除が重要な特定外来生物クビアカツヤカミキリの啓発チラシも作成し、講習会等で配布しました（P. 4）。

本事例集は、令和 5～7 年度の 3 年間に京都府内 6 市で実施した防除講習会（7 種・計 14 回）の内容や運営体制を紹介し、地域と連携した外来生物対策の推進事例として取りまとめたものです。今後の防除の参考として、ぜひご活用いただければ幸いです。

京都府自然環境保全課・きょうと生物多様性センター

¹ 「生態系等に係る被害」とは、生態系、人の生命・身体、農林水産業に対する被害を指す。

1 本事業・本事例集について

(1) 京都府地域と連携した外来生物対策推進事業について

本事業は、地域で外来生物対策を進める際に障壁となっている「防除方法に関する専門知識の不足」や「防除資材の不足」を解消することを目的とする。必要な資材の貸し出しや専門知識を有する講師の派遣を行い、防除の実演や技術的助言を行う講習会を府内各地域で実施した（表1）。

事業の実施にあたっては、募集要領に基づき外来生物対策に関心を持つ地域・団体を公募し、事前ヒアリングや現地視察を経て、さまざまな視点から講習会を開催できるよう実施候補地を選定した。講習会後は、地域が継続的に取り組めるよう、相談対応や資材提供などのフォローアップ体制を整え、講習会開催までの手順を示したフローチャートも整理した（図1）。

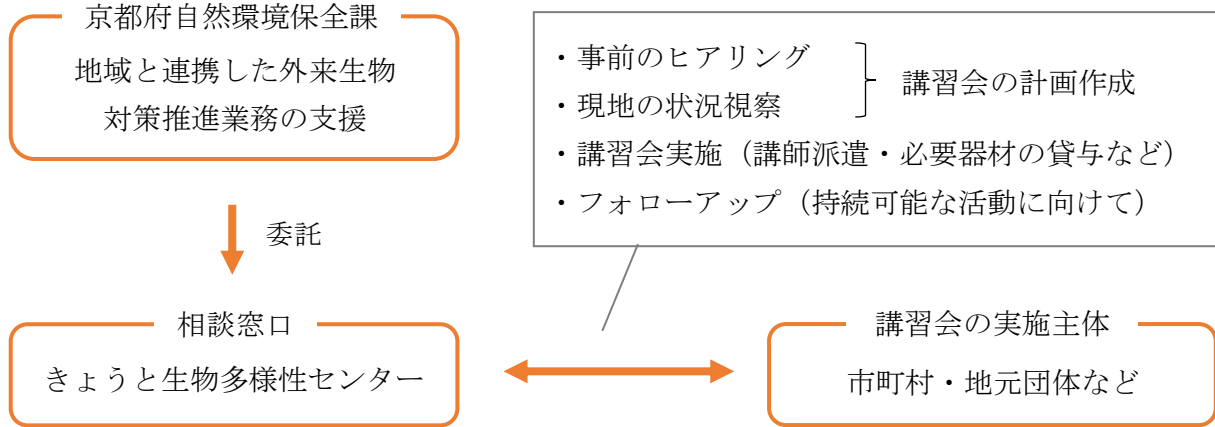
図1に示すとおり、講習会の開催や地域での持続的な対策には、多様な主体の協力が欠かせない。そこで、主体間の連携・協力の調整や、必要な情報提供・助言を行う拠点として位置づけられている「地域生物多様性増進活動支援センター」である「きょうと生物多様性センター」を本事業の窓口とした。

本事業には、環境省の「特定外来生物防除等対策事業交付金」を活用した。この交付金は、令和5年4月の外来生物法改正を受け、地方公共団体が実施する特定外来生物の防除等を財政的に支援する制度であり、本事業では令和5～7年度の3年間にわたり活用した。総事業費は、令和5年度 2,600千円、令和6年度 1,400千円、令和7年度 980千円となる。

表1 各年度に実施した防除講習会

	防除講習会の実施日・実施自治体（対象の特定外来生物）
令和5年度 (計8回)	① 9月23日 京田辺市（アメリカザリガニ）
	② 10月7日 八幡市（アカミミガメ、アメリカザリガニ、カダヤシ）
	③ 11月30日 福知山市（アカミミガメ）
	④ 2月19日 木津川市（アメリカザリガニ）
	⑤ 2月26日 京都市（アカミミガメ）
	⑥ 3月4日 福知山市（アカミミガメ）
	⑦ 3月4日 福知山市（アカミミガメ）
	⑧ 3月13日 京都市（アルゼンチンアリ）
令和6年度 (計4回)	① 5月31日 京丹後市（オオキンケイギク）
	② 6月2日 木津川市（アメリカザリガニ）
	③ 9月11日 福知山市（アカミミガメ）
	④ 10月14日 京都市（オオハンゴンソウ）
令和7年度 (計2回)	① 5月24日 京都市（オオバナミズキンバイ）
	② 10月13日 京都市（ブルーギル、ブラックバス）

図1 防除講習会実施のためのフローチャート



<きょうとの外来種ハンドブック>

外来種の影響

生態系への影響

人・健康への影響

私たちにできること/
外来種被害予防3原則

入れない！

すてない！

拡げない！

外来種って何？

特定外来生物

高付付種外来生物

裏面には、府内で確認されている13種の特定外来生物を紹介している。

<クビアカツヤカミキリの啓発チラシ>

特定外来生物
クビアカツヤカミキリ

警告中!!

水の内側を食いながら
特らす!

成虫を見つけたら、
駆除剤などを使って駆除を!

防除のご協力をお願いします。
みなさまの力で京都のサクラを守りましょう!

いずれも、京都府のホームページ (<https://www.pref.kyoto.jp/gairai/index.html>) からダウンロード可能。

(2) 本事例集の構成について

防除講習会は、令和5～7年度の3年間で7種を対象に、京都府内6市で計14回実施した。

本事例集では、対象とした各種について、分類や生態的特徴に加え、京都府外来生物カテゴリー、府内における影響度、確認状況および定着状況を記載した。これらの情報は、京都府外来種データブック(2020)²(<https://www.pref.kyoto.jp/gairai/databook2020.html>)に基づいており、選定基準および評価方法は表2、表3に示すとおりである。

また、各種の分布マップは、きょうと生物多様性センターが収集した分布情報を基に作成した。なお、分布しないとされる市町村を無着色としているが、これは確実な記録や情報が得られなかったことによるものであり、既に侵入している可能性がある点に留意する必要がある。

表2 選定基準(外来生物カテゴリー)

カテゴリー	基準
被害甚大種	京都府内における被害 ³ が大きく、又は大きくなる可能性が強く緊急に対策が必要な外来生物
被害危惧種	京都府内における被害があり、又は被害が生じる可能性が強く対策が必要な外来生物
準被害危惧種	京都府内において今後被害が起こる可能性があり、対策を検討する必要がある外来生物
要注目種	京都府内において今後の動向を注目すべき外来生物
情報不足種	情報が不足している外来生物

表3 府内における影響度と確認・定着状況(タイプ)

		影響度			
		大(A)	中(B)	小(C)	不明(D)
確認種	定着(a)	Aa	Ba	Ca	Da
	不明(b)	Ab	Bb	Cb	Db
	未定着(c)	Ac	Bc	Cc	Dc
未確認種(d)		Ad	Bd	Cd	Dd

² 京都府では、府内に侵入し定着している外来種の生息実態及び被害状況を把握するため、「京都府外来生物専門委員会」を設置し「外来生物実態調査」を行い、その成果として「京都府外来種データブック」を作成・公表している。

³ 生態系被害、農林水産業被害、人身・健康被害、生活被害など。

2 各事例紹介

(1) アカミミガメ (*Trachemys scripta elegans*)

➤基礎データ

目科名	カメ目ヌマガメ科
府カテゴリー・タイプ	被害甚大種・Aa
環境省カテゴリー	条件付特定外来生物
原産地	アメリカ合衆国南部からメキシコ北東部
導入・侵入年代	1950年代。幼体（ミドリガメ）がペットとして大量に輸入され、その後遺棄された個体が定着。
分布範囲	<p>全国：北海道から沖縄まで 国内の大部分の地域。</p> <p>府内：府内ほぼ全域に 分布域を拡げている。</p> 
特記事項	<p>■世界の侵略的外来種ワースト 100</p> <p>■日本の侵略的外来種ワースト 100</p> <p>□特定外来生物（外来生物法）</p> <p>■条件付特定外来生物（外来生物法）</p>



➤生態

生態的特性	<p>河川、池、水路などの水域に生息し、幼体は動物質食を好むが、成体は植物質食も旺盛に食す。昼行性で日光浴を好むので、目撃されやすい。年にほぼ3回、5～8月に産卵する。在来のカメ類より食欲で気性が荒く、繁殖力が強く、産卵数も多い。また、都市部の環境への適応力も高い。塩分への抵抗力が高く、しばしば汽水域にも進出する。</p>
近似種との見分方	<p>眼の後ろに特徴的な赤い斑紋をもつが、成熟雄の黒化個体では消失する。雌の背甲長は最大 27cm 近くに達する。幼体は黄緑色ないし緑色でほぼ円形の背甲を持つ（通称ミドリガメ）。</p>

➤被害

被害状況	<p>成体の旺盛な食欲により、ハスなどの水耕栽培植物を食害し、農業被害や観光被害が出ている。また、稀少水草の食害が懸念される。各地で土着の小動物を食害するとともに、カメ類在来種と競合し、それらを排除して生態系を攪乱していると推定される。</p>
[被害対象]	<p>■生態系被害 ■農林水産業被害 □人身・健康被害 □生活被害</p>

[影響内容]	<input checked="" type="checkbox"/> 上位捕食者となる <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱 <input checked="" type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響
[性質特性]	<input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い <input checked="" type="checkbox"/> 拡散能力が高い
[被害程度]	<input checked="" type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い <input type="checkbox"/> 被害が大きい <input type="checkbox"/> 特殊性 <input checked="" type="checkbox"/> 回復困難性

➤対策

必要な防除対策	餌付き罟 ⁴ や日光浴罟 ⁵ を用いることで捕獲は可能であるが、定着個体をすべて駆除することは困難である。生態系や農業への被害が懸念される地域においては、継続的な捕獲による低密度管理が必要となる。また、ペット由来の放逐が主な要因であることから、生涯飼育の啓発や、輸入・販売に対する何らかの規制措置が求められる。
---------	---

➤事例紹介

事例 1：八幡市

令和 5 年 6 月にアカミミガメが条件付特定外来生物に指定されたことを受け、八幡市が主催する自然観察会「はちまんさんの自然を体験しよう！（水辺の生き物編）」において、外来生物に関する啓発を行いたいとの依頼があった。

講師には一般社団法人淡水生態研究所を招き、餌付き罟を用いたアカミミガメ等の捕獲実演や、生態系への影響に関する解説を実施した。当日は、カダヤシ（特定外来生物）多数、タモロコ（在来種）1 個体、スジエビ（在来種）数個体、ヌマエビ数個体、スクミリンゴガイ（指定外来種）1 個体、モツゴ（在来種）多数、ギンブナ（在来種）2 個体、クサガメ（外来種）1 個体、アメリカザリガニ（条件付特定外来生物）1 個体が捕獲された。

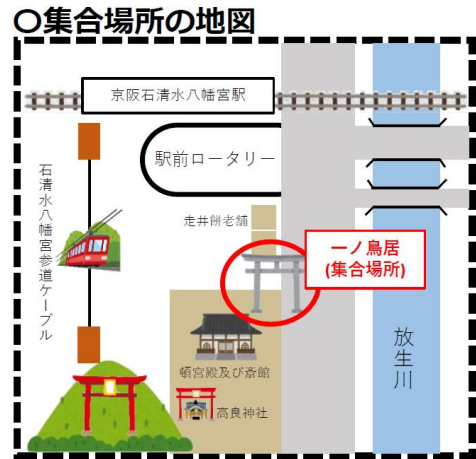
参加者には親子が多く、外来種が多数を占める現状を目の当たりにした大人（地域住民・保護者）からは、河川環境が以前とは異なる状況に変化していることへの危惧が多く寄せられ、外来生物に対する関心を高めてもらう機会を創出することができた。

⁴ イワシやアジ等の鮮魚、塩サバ、煮干し等を餌として誘引する。活動が活発な春～夏に有効で、前日に設置し、翌日に回収する。高確率で捕獲できるが、毎日の餌交換が必要であり、また、繰り返し使用すると、罟慣れを起し、捕獲率が下がる場合がある。

⁵ 甲羅干しの習性を利用した罟であり、春～秋に利用可能。捕獲効率は下がるが、餌が不要であり、1 箇月に 1 回の引き上げで済むなど手間がかからない。設置場所は流れがないため池や湖沼が適しており、設置は 2 人以上で行う。1 基当たり約 1 万円で作成可能。作成方法や設置方法については、環境省アカミミガメ防除の手引き（https://www.env.go.jp/nature/intro//3control/files/akamimi_tebiki.pdf）を参照。



開催場所	八幡市放生川
共催	八幡市建設産業部環境政策課
協力者	石清水八幡宮 京都八幡ロータリークラブ ボーイスカウト綴喜第一団
講師	一般社団法人淡水生態研究所
参加者	ボランティア、親子など 58 名
効果	捕獲方法の知見を得る 外来種の侵入状況を知る



餌付き罫で捕獲したクサガメ



捕獲した生き物を観察する様子

事例 2：京都市

淀城跡公園の堀で咲く蓮は、大型の花を咲かせる固有種であり、「淀姫」として知られている。しかし、この蓮がアカミミガメによる食害を受けていた。2017年から淀観光協会がアカミミガメの防除を行っていたものの、新型コロナウイルス感染症の流行に伴う活動縮小、日光浴罫の破損、さらに淀観光協会役員の高齢化により、防除活動は停滞していた。このため、活動再開に向けた支援の依頼があった。

防除講習会では、一般社団法人淡水生態研究所を講師として招き、可動式日光浴罫の設置実演や、持続的に活動を進めるためのノウハウについて説明した。講習会の開催により、淀観光協会の防除活動が公園管理者や自治会に周知され、さらに地元企業の理解を得て、可動式日光浴罫のロープの固定・操作が可能となった。地域の貴重な財産である「淀姫」の保全のため、地域の理解・協力を得る機会となった。



開催場所	京都市淀城跡公園
活動主体	淀観光協会
協力者	公園管理者、地元企業
講師	一般社団法人淡水生態研究所
参加者	淀観光協会会員、京都市伏見土木みどり事務所、近隣市民など 20 名
効果	活動の再スタートの機会創出
開催後	日光浴罾を設置し、環境整備に取り組む



アカミミガメを捕獲する様子



開催後の環境整備の様子

((一社)淡水生態研究所HPより引用)

事例 3 : 福知山市

総合公園である三段池公園は、園内に児童科学館、動物園、植物園、スポーツ施設など、多様な機能を有する。市民が多く利用する場であり、不特定多数の来園者の目に触れる三段池公園で防除対策に取り組むことで、外来生物に関心のない層にも問題を知ってもらい、考える機会を創出したいとの意向から、児童科学館より依頼があった。

講師には一般社団法人淡水生態研究所を招き、計 4 回の防除講習会を実施した。1 回目は、罾の種類や捕獲方法、さらに「カメ」を起点とした自然の楽しみ方など、初心者向けの座学を行った。また、アンカーを用いた日光浴罾の設置を試みたが、定常管理に課題があったため、2 回目には管理者である福知山市の協力を得て、ロープによる日光浴罾の設置を行った。3 回目は、施設内で持続可能な防除・処理が可能となるよう、捕獲した個体を堆肥化⁶する方法について座学を行い、4 回目には堆肥化の実習を実施した。

講習会には、公園関係者、地元企業、他自治体担当者、保全団体など多様な主体が参加し、地域での持続的な活動のための拠点づくりを進めることができた。

⁶ 冷凍処理したアカミミガメの最終処理方法の一つで、枯草や腐葉土を用いて堆肥化する。カメ類から生産される堆肥は栄養価が高いため、畑やビオトープ等に活用できる。堆肥化の方法については、一般社団法人淡水生態研究所の HP (<https://tansuiseitaiken.com/archives/1028>) を参照。

開催場所 福知山市三段池公園
 活動主体 福知山市児童科学館
 協力者 福知山市エネルギー・環境戦略課
 講師 一般社団法人淡水生態研究所
 参加者 近隣市行政担当者、ボランティア、
 保全団体、福知山自然科学協力員
 など計 57 名
 効果 地域の外来生物対策の拠点づくり
 開催後 日光浴罟を設置し、捕獲に取り組む



日光浴罟の設置の様子



堆肥化作業の様子

(2) アメリカザリガニ (*Procambarus clarkii*)

➤基礎データ



目科名	十脚目アメリカザリガニ科
府カテゴリー・タイプ	被害甚大種・Aa
環境省カテゴリー	条件付特定外来生物
原産地	米国
導入・侵入年代	1927年。ウシガエルの餌として導入された。
分布範囲	<p>全国：北海道を除く日本各地に定着。北海道でも数カ所の温泉排水などで息が確認されている。</p> <p>府内：府内全域の河川、湖沼、ため池、水路、水田などに定着していると考えられる。</p> 
特記事項	<input type="checkbox"/> 世界の侵略的外来種ワースト 100 <input checked="" type="checkbox"/> 日本の侵略的外来種ワースト 100 <input checked="" type="checkbox"/> 条件付特定外来生物（外来生物法）

➤生態

生態的特性	<p>全長8 cm程度で、成体は赤と黒の派手な体色。5対の歩脚を有し、第1脚は大きなはさみとなっている。比較的温暖な湿地に生息し、雑食性。低い溶存酸素にも耐えることが可能。6～9月までの繁殖期に数百個の卵を産む。卵期とふ化後の幼生期は母親の腹脚の間で保護される。体長8 mm になった稚エビは、親と同じ底生生活を開始し、通常は2年で繁殖を開始する。</p>
近似種との見分方	<p>アメリカザリガニの幼生は、赤褐色で体形がずんぐりしているためニホンザリガニに誤認されることもあるが、ニホンザリガニは、北海道・東北に分布し、京都府には分布していない。</p>

➤被害

被害状況	<p>河川、湖沼、ため池、水路、水田などで水生小動物や水生植物に対する食害が知られている。また、イネの根の食害のほか、田の畦や排水水路の土手に穴をあけるなどの農業被害も見られる。</p>
[被害対象]	<input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害 <input checked="" type="checkbox"/> 農林水産業被害 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害 <input type="checkbox"/> 生活被害
[影響内容]	<input type="checkbox"/> 上位捕食者となる <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介 <input checked="" type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱 <input type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響

[性質特性]	<input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い
[被害程度]	<input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 被害が大きい <input type="checkbox"/> 特殊性 <input type="checkbox"/> 回復困難性

➤対策

必要な防除対策	ウシガエルとオオクチバスがアメリカザリガニの捕食者として知られている。このため、湖沼やため池などの水域生態系において、ウシガエルやオオクチバスの駆除を不用意に実施すると、アメリカザリガニが増加することによって、水生植物群落やそれに依存するトンボ等水生昆虫類が壊滅するといった二次的被害を引き起こす恐れがある。こうした事態を避けるためには、アメリカザリガニの個体群をモニタリングし抑制策を講じるような生態系管理が必要である。
---------	---

➤事例紹介

事例 4 : 京田辺市

外来生物法の改正によりアメリカザリガニが条件付特定外来生物に指定されたことを受け、京田辺市においても多くの個体が確認されていることから、市民への周知を図りたいとの依頼が市からあった。防除講習会を実施した田辺公園は、里山的環境と丘陵地が残る総合公園であり、外来生物に限らず身近な自然にも目を向けてもらえる内容とした。

講習会ではザリガニ釣り⁷を行うとともに、在来種を含めた生物調査を実施した。また、公園内の管理状況や池の植生については、京田辺市環境市民パートナーシップから説明を受けた。当日はアメリカザリガニ 14 個体のほか、ヌマエビ類、スジエビ、シオカラトンボのヤゴ、エラミミズ、ユスリカ幼虫、シマアメンボ、ナミアメンボ、ホソバトビケラ幼虫など、多様な生物を観察した。

観察後には外来生物に関する講義を行い、参加者とともに今後の課題について議論した。身近な公園で外来種と在来種の両方を観察することで、外来生物問題を体験的に理解する機会となった。

開催場所	京田辺市田辺公園
共 催	京田辺市経済環境部環境課
協力者	京田辺市環境市民パートナーシップ
講 師	京田辺市環境市民パートナーシップ 京都府職員、センター職員



捕獲した生き物を観察する様子

⁷ 効率的な防除は見込めないが、子どもと一緒に楽しめるため、普及啓発の一環として効果がある。餌はスルメ等を用意し、釣り竿は子どもが扱いやすい約 1 m の竿とした。アメリカザリガニは夜行性のため、朝夕が釣りやすい。

参加者 京田辺市公園緑地課、親子など 24 名
効 果 外来生物による在来生態系への影響を
考える機会の創出



釣りの様子

事例 5 : 木津川市

木津川市鹿背山は、多様な主体が連携し、希少生物の生息地保全や里地里山景観の再生に取り組む「生物多様性第 2 次木津川市地域連携保全活動計画～みもろつく鹿背山再生プラン～」の対象地域となっている。鹿背山を拠点として活動する鹿背山倶楽部から、希少生物の生息地内にアメリカザリガニが定着し、希少生物の卵や幼生に被害が生じている可能性が高いとの理由で、本事業への依頼があった。

1 回目の講習会では、一般社団法人淡水生態研究所を講師として招き、罾⁸の仕組みや仕掛け方のコツを実習した。近隣自治体の行政担当者や、周辺地域で活動する保全団体の参加が多く、技術的な実習を通じて地域一帯での防除体制づくりの促進につながった。

2 回目は、一般市民を対象とした外来生物を学ぶ場を設けたいとの意向から、木津川市子どもエコクラブサポーターの会より依頼があった。例年実施している親子参加型の自然観察会に外来生物のテーマを設定し、事前に設置した罾の回収と、在来生物を含めた生き物調査を行った。講師は鹿背山倶楽部が務め、希少生物の保全活動やアメリカザリガニによる影響について解説した。調査後は、参加者全員で観察された生き物のマップやリストを作成し、前年度に観察された種や種数と比較した。

講習会後は、鹿背山倶楽部に罾を貸与し、毎週アメリカザリガニの捕獲を継続した。ピオトープ池が猪の被害を受けたため、令和 7 年は 9 月までの捕獲となったが、捕獲数は減少傾向を示した（表 4）。また、令和 7 年度の自然観察会では、例年確認されていなかったアキアカネのヤゴが観察され、継続的な外来生物対策の重要性を実感する機会となった（表 5）。

⁸ 水深が 30cm 程度のためアナゴカゴを設置。コイの養殖餌、釣り用練り餌、煮干し等の餌で誘引し、市販の罾類の中では最も捕獲効率が高いとされている。1 名で設置・回収が可能で、1 週間に 1 度回収し、餌の交換及び捕獲数をカウントした。その他の網ワナ類や捕獲方法については、環境省アメリカザリガニ対策の手引き（https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/r_amezari_tebiki2.pdf）を参照。



開催場所 木津川市鹿背山
 活動主体 鹿背山倶楽部 (R5)、木津川市子どもエコクラブサポーターの会 (R6)
 協力者 木津川市都市計画課、まち美化推進課
 講師 一般社団法人淡水生態研究所 (R5)、鹿背山倶楽部 (R6)
 参加者 近隣行政担当者、保全団体、親子など計 59 名
 効果 在来生物、希少生物の回復を実感
 開催後 鹿背山倶楽部により、毎週捕獲を実施



罟を仕掛けている様子 (R5)



自然観察会の様子 (R6)

表4 令和6～7年度に捕獲されたアメリカザリガニの捕獲数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
月集計(個体)	R6	43	85	172	59	73	107	43	8
	R7	17	45	29	20	17	34	-	-
週平均(個体)	R6	14.3	21.3	34.4	14.8	18.3	26.8	10.8	2
	R7	8.5	11.3	9.7	10	5.7	34	-	-

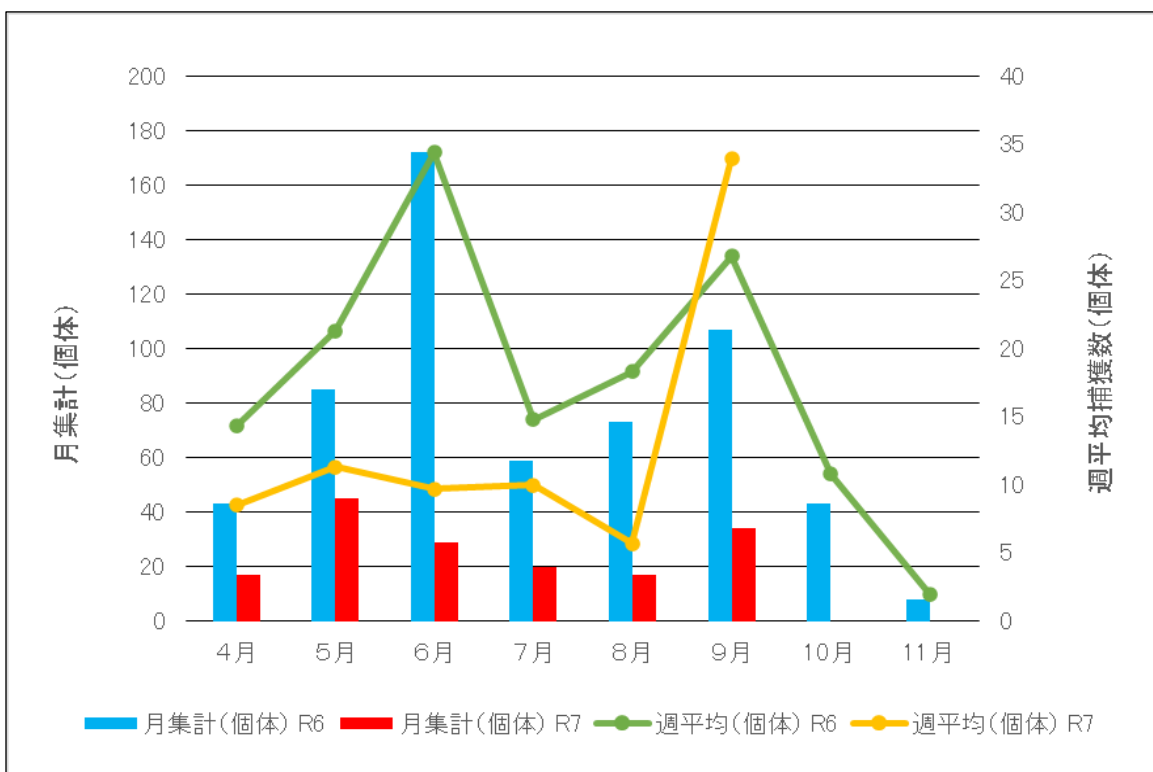


表5 令和6～7年度の自然観察会で観察された生き物

ビオトープ池	2024年	2025年
アキアカネのヤゴ		○
イトトンボのヤゴ	○	○
オニヤンマのヤゴ	○	
キイロサナエ	△(脱皮殻)	△(成虫)
サナエトンボのヤゴ	○	
シオカラトンボのヤゴ	○	○
コカゲロウ	○	○
ガムシ	○	
コシマゲンゴロウ	○	
アメンボ	○	○
シマアメンボ	○	
ヒメアメンボ	○	○
コミズムシ		○
ボウフラ		○
マツモムシ		○
ミズムシ		○
ユスリカの幼虫	○	○
アメリカザリガニ	○	○
ヌマエビ	○	○
ヨコエビ	○	
サワガニ	○	○
エラミミズ	○	
カワニナ	○	○
サカマキガイ	○	○
カワムツ	○	
ドジョウ	○	
メダカ	○	○
オタマジャクシ(アカガエル?)	○	○
シュレーゲルアオガエル?	○	
トノサマガエル	○	○
ニホンアカガエル	○	
ヌマガエル		○
種数	25	20



観察された生き物のマップ

中切川	2024年	2025年
コカゲロウ	○	○
ヒラタカゲロウ		○
モンカゲロウ	○	○
オニヤンマのヤゴ	○	○
ヤンマのヤゴ	○	○
トビケラ		○
アメンボ	○	
シマアメンボ	○	○
ガガンボの幼虫		○
ガムシ		○
ブユ	○	○
サワガニ	○	○
ヨコエビ	○	○
ウズムシ	○	
ヒル		○
アマガエル		○
トノサマガエル		○
種数	10	15

陸地	2024年	2025年
ウラギンシジミ		○
キタキチョウ		○
ベニシジミ		○
モンキチョウ		○
モンシロチョウ	○	○
ヤマトシジミ	○	○
ルリシジミ	○	
オオアオイトトンボ		○
キイロサナエ		○
モノサシトンボ		○
ヤマサナエ	○	
オオスズメバチ		○
カマキリの幼体	○	
ケラ	○	
テントウムシ		○
クモ	○	○
カタツムリ	○	○
アマガエル		○
トノサマガエル	○	○
ヌマガエル		○
カナヘビ	○	○
ニホントカゲ	○	○
ヒバカリ	○	
種数	12	18

合計種数	47	53
------	----	----

(3) アルゼンチンアリ (*Linepithema humile*)

➤基礎データ



目科名	膜翅目アリ科
府カテゴリー・タイプ	被害甚大種・Aa
環境省カテゴリー	特定外来生物
原産地	南米
導入・侵入年代	1993年頃。貨物への紛れ込み。
分布範囲	<p>全国：22都府県。 府内：京都市伏見区。</p>
特記事項	<p>■世界の侵略的外来種ワースト 100 ■日本の侵略的外来種ワースト 100 ■特定外来生物（外来生物法）</p>

➤生態

生態的特性	植木鉢やコンクリートの隙間など、人工物の小空間に営巣する。多数の働きアリと複数の女王からなる大規模なコロニーをつくり、主に分巢によって分布を拡大する。多くの在来アリと異なり、冬場にも活動が見られる。
近似種との見分方	腹部末端の開口部は線状。前伸腹節は側面から見て弧状。密な列をなして移動し、動きは早い。冬でも活動が見られる。

➤被害

被害状況	屋内侵入による不快害虫としての被害、在来アリとの競争による生態系への被害、農作物への食害等がある。
[被害対象]	■生態系被害 □農林水産業被害 □人身・健康被害 ■生活被害
[影響内容]	<p>□上位捕食者となる □植生への影響 ■競合・駆逐</p> <p>□遺伝子かく乱 □在来種への病気・寄生虫の媒介</p> <p>□土壌・環境攪乱 □希少種・固有種への影響</p>
[性質特性]	<p>■定着性が高い □環境適応性が高い ■繁殖能力が高い</p> <p>□拡散能力が高い</p>
[被害程度]	□対策の緊急性が高い □被害が大きい □特殊性 ■回復困難性

➤対策

必要な防除対策	防除は困難とされているが、フィプロニルを主成分とするベイト剤および液剤を利用した計画的な防除により、根絶に成功した例も報告されている。
---------	---

➤事例紹介

事例6：京都市

2008年にアルゼンチンアリの侵入が確認された京都市伏見区では、2013年に「京都市伏見区アルゼンチンアリ根絶協議会」が発足し、薬剤や液剤による防除⁹およびモニタリング¹⁰を継続して実施してきた。市街地においては2021年2月以降、新たな確認はなくなっていたものの、河川敷では再出現や侵入拡大が起こっており、実効性のある防除手法の確立が課題となっていた。このため、京都市伏見区アルゼンチンアリ根絶協議会から本事業への依頼があった。

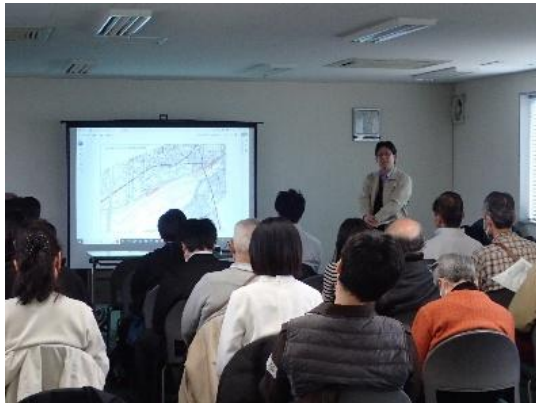
講習会では、兵庫県立人と自然の博物館主任研究員の三橋弘宗氏を講師とし、新たな薬剤の作成手順に関する解説や、生息地を物理的に封鎖する手法¹¹の実習を行った。また、京都市伏見区アルゼンチンアリ根絶協議会および国土交通省淀川河川事務所伏見出張所から、これまでの防除の経緯が説明され、外来生物の防除が抱える課題を共有する機会となった。参加者には地元企業や公園管理者も多く、多様な主体が自立的に防除を行うための技術的知見を得る場となった。

⁹ 化学的防除。社会性昆虫である本種の防除には、遅効性で連鎖殺虫効果のある殺虫剤が用いられることが多い。固形型、粒型、液体型、ペースト型等があるが、粒型や液体型等で面的防除を実施する際は、周辺へ逃げ込みが起きないように、予め周辺の防除を実施することが望ましい。京都府では、フィプロニルを有効成分とするフマキラー株式会社製のベイト剤を用い、周辺からの再侵入を防ぐため一斉に防除をしていた。また、液体型はネオニコチノイドを有効成分とするシンジェンタジャパン株式会社製の液剤を用い、在来アリやその他の地表性昆虫への影響を鑑み、冬季に実施していた。その他の防除手法や詳細については、環境省アルゼンチンアリ防除の手引き (https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/manual_argentine.pdf) を参照。

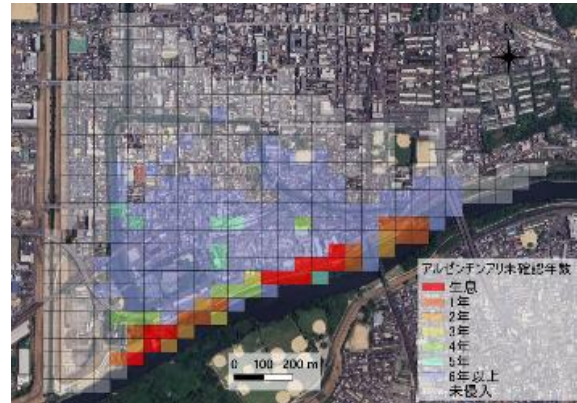
¹⁰ 防除効果の検証や根絶判断の目安となる。砂糖を誘引剤としたベイトトラップ法や粘着トラップで捕獲する方法がある。京都府では、毎月市街地ではベイトトラップ法を、年1回事業所で粘着トラップ法を実施した。粘着トラップ法は誘引剤がないため、3～7日間トラップを設置しておく必要があるが、詳細に分布範囲を把握したい場合に適している。モニタリング手法の詳細や根絶判断の目安は、環境省アルゼンチンアリ防除の手引きを参照。

¹¹ コンクリートの割れ目といった人工物の小空間に営巣するため、物理的に塞ぐことで防除する。コンクリートの流し込みや、ペースト状にした薬剤の練り込み等がある。事前に草刈りを実施し、営巣し得る場所を確認しておくことが望ましい。

開催場所 京都市伏見区
活動主体 京都市伏見区アルゼンチンアリ根絶協議会
協力者 淀川河川事務所伏見出張所
講師 兵庫県立人と自然の博物館
参加者 近畿地方環境省事務所、近隣行政担当者、地元住民、地元企業など 33 名
効果 防除手法の専門的知見を得る
開催後 モニタリングを実施し、新たな防除手法の実効性を確認



講習会の様子

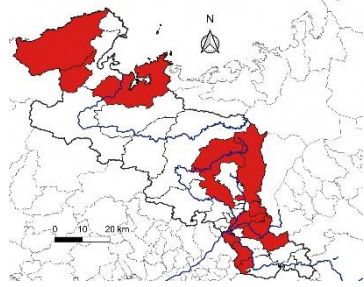


モニタリング結果 (R6)

(4) オオキンケイギク (*Coreopsis lanceolata*)

➤基礎データ



目科名	キク目キク科
府カテゴリー・タイプ	準被害危惧種・Ba
環境省カテゴリー	特定外来生物
原産地	北アメリカ
導入・侵入年代	明治中期。観賞用。
分布範囲	<p>全国：ほぼ全国。 府内：ほぼ全域。 ※きょうと生物多様性センターのデータベースにデータ登録がない市町村は無着色になっている。</p> 
特記事項	<input type="checkbox"/> 世界の侵略的外来種ワースト 100 <input checked="" type="checkbox"/> 日本の侵略的外来種ワースト 100 <input checked="" type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）

➤生態

生態的特性	5～7月に開花し、多年草。茎は束生し高さ 30～70cm になる。舌状花は橙黄色で、花冠の先は4～5裂。地下部が頑丈。近年高速道路の法面に種子吹付けが行われるようになり、急速に拡散する要因となった。しばしば群生、大群落をなす。河川敷や堤防でも大繁殖することがある。
近似種との見分方	ハルシャギク（稀に逸出・帰化）と似ているが、これの舌状花基部には赤く染まるので、黄色一色のオオキンケイギクとは区別できる。

➤被害

被害状況	群生した場合は他の植物に悪影響を及ぼす。
[被害対象]	<input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害 <input type="checkbox"/> 生活被害
[影響内容]	<input type="checkbox"/> 上位捕食者となる <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響
[性質特性]	<input type="checkbox"/> 定着性が高い <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い <input checked="" type="checkbox"/> 拡散能力が高い
[被害程度]	<input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い <input type="checkbox"/> 被害が大きい <input type="checkbox"/> 特殊性 <input type="checkbox"/> 回復困難性

➤対策

必要な防除対策	群生地では、開花期に刈り取りを行う。しかし、花が美しく目立つため、周辺住民への事前の説明が必要となる。地下部は非常に頑丈であることから、根茎を残さず丁寧に掘り取ることが望ましい。
---------	---

➤事例紹介

事例 7：京丹後市

長年、地元団体を中心に駆除活動が行われてきたが、外来植物や駆除の目的を十分に理解しないまま参加している人も多かった。開催場所周辺には、国の名勝・天然記念物に指定されている琴引浜が位置し、希少な動植物も多く確認される地域である。このため、改めて外来種駆除の意義を理解し、地域の自然環境への関心を高めたいとの理由から、地元団体より依頼があった。

当日は、きょうと生物多様性センターが講師となり、外来種の概要やその被害全般について説明した。また、参加者には地元住民や地元企業の関係者が多かったことから、オオキンケイギクの刈り取り・抜き取り¹²を行う際の注意点について解説し、継続的な防除の必要性を共有した。

開催場所	京丹後市網野町掛津
活動主体	琴引浜の鳴り砂を守る会、白砂青松保存委員会、 掛津地区婦人会まんま倶楽部
協力者	京丹後市市民環境部生活環境課
講師	きょうと生物多様性センター
参加者	京丹後市、地元住民、地元企業など 53 名
効果	外来生物駆除の必要性を理解



刈り取り・抜き取りしたオオキンケイギク



京丹後市による回収

¹² 開花・結実期の5～7月より前に、刈り取りや抜き取りを実施することが望ましい。地下部は頑丈で、根茎から再生するため、抜き取りの際には残さないようにする。

(5) オオハンゴンソウ (*Rudbeckia laciniata*)



➤基礎データ

目科名	キク目キク科
府カテゴリー・タイプ	準被害危惧種・Ca
環境省カテゴリー	特定外来生物
原産地	北アメリカ
導入・侵入年代	明治中期。逸出確認は1955年。観賞用。
分布範囲	<p>全国：北海道～沖縄県。 府内：京都市左京区、右京区、南丹市。</p>
特記事項	<input type="checkbox"/> 世界の侵略的外来種ワースト100 <input type="checkbox"/> 日本の侵略的外来種ワースト100 <input checked="" type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）

➤生態

生態的特性	7～10月に開花し、根茎で越冬する。舌状花は黄色。冷涼で湿潤な環境を好むが、かなり幅広い環境でも生育する夏緑性の多年草。適地では大群落を成して、他の植物を締め出してしまう。ただし、暖地で夏に乾燥するところでは、広がることは稀。
近似種との見分方	高く伸びる草体や花（頭状花）はキクイモやイヌキクイモに似ているが、オオハンゴンソウの葉は互生し、単羽状に深～浅裂する。キクイモ類の葉は茎の下半部で対生、葉は鋸歯縁である。ハンゴンソウは別属の在来種で、葉は単羽状全裂。

➤被害

被害状況	京都市左京区の生育地では溪流沿いに繁茂し、一部は近くの農地や道端にも広がっている。溪流に沿うものは高茎の群落となり、他の植物を圧倒しており、植生の単純化が進む。
[被害対象]	<input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害 <input type="checkbox"/> 生活被害
[影響内容]	<input type="checkbox"/> 上位捕食者となる <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響 <input type="checkbox"/> 競合・駆逐 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響
[性質特性]	<input type="checkbox"/> 定着性が高い <input type="checkbox"/> 環境適応性が高い <input type="checkbox"/> 繁殖能力が高い <input type="checkbox"/> 拡散能力が高い
[被害程度]	<input type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い <input type="checkbox"/> 被害が大きい <input type="checkbox"/> 特殊性 <input type="checkbox"/> 回復困難性

➤対策

必要な防除対策	根茎で越冬する多年草であるため、掘り起こして根茎ごと除去する必要があるが、溪流に沿う場所では根茎の切れ端を下流に流さない配慮が必要。農地や道端のものは種子の供給源になるため、やはり掘り取りが望ましい。
---------	--

➤事例紹介

事例 8：京都市

長年、地元団体を中心にオオハンゴンソウの駆除活動が行われてきたが、根絶には至らず、今後の取組方針に苦慮していた。また、周辺には里山的環境が残されているものの、オオハンゴンソウの繁茂によって在来植物の生育が阻害されていたことから、地元団体より本事業への依頼があった。

講習会では、近隣地域でオオハンゴンソウの防除に成功している農事組合法人むぎわらぼうしを講師として招き、耕運機による掘り起こし¹³を用いた防除事例の紹介と実演を行った。耕運機を用いた方法は、シャベル等による掘り取りとは異なり、根拾いに大きな力を必要としないため、親子でも参加しやすい作業となった。また、地域間の交流を深めるとともに、新たな防除手法に関する知見を得る機会となった。

開催後も防除活動を継続した結果、取組が評価され、地元企業からの支援を得るに至った。

開催場所	京都市左京区花背
活動主体	NPO 法人自然観察指導員京都連絡会
協力者	花背自治会
講師	農事組合法人むぎわらぼうし
参加者	地元住民、行政担当者など 42 名
効果	新たな防除手法の知見を得る
開催後	地元企業の支援



耕耘機を使用している様子




根拾いの様子

¹³ オオハンゴンソウは根茎で越冬するため、掘り取りによって根茎ごと除去することが望ましい。掘り取りが困難な場所では、種子の供給源とならないよう刈り取りを行う必要がある。作業の時期としては、開花・結実期である 7～10 月より前に実施することが望ましい。京都府の事例では、地表に伸びたオオハンゴンソウを刈り取った後、耕運機により根茎を掘り起こすことで、効率的に根拾いを行うことができた。

(6) オオバナミズキンバイ (*Ludwigia grandiflora*)



➤基礎データ

目科名	フトモモ目アカバナ科
府カテゴリー・タイプ	被害危惧種・Ba
環境省カテゴリー	特定外来生物
原産地	暖帯～熱帯アメリカ
導入・侵入年代	2000年代前半。アクアリウム植物として。
分布範囲	<p>全国：主に関東～九州。 府内：京都市、向日市、 長岡京市、八幡市。 ※きょうと生物多様性センターのデータベースにデータ登録がない市町村は無着色になっている。</p> 
特記事項	<input type="checkbox"/> 世界の侵略的外来種ワースト 100 <input type="checkbox"/> 日本の侵略的外来種ワースト 100 <input checked="" type="checkbox"/> 特定外来生物（外来生物法）

➤生態

生態的特性	<p>湿りがちの陸地から開放水域に生育する多年草。葉は対生し光沢がある。茎は陸上で斜上から直立して高さ 1m ほどとなり、開放水域では水面に浮かんで広がる。陸地に生えた場合、地下部に頑丈な根を張り、重機でないと除去困難なほどの厚みのある群落を形成する。6～10月に直径3～4cmほどの黄色い5弁花を咲かせる。葉や茎の切れ端からでも再生し、繁殖力が強い。</p>
近似種との見分方	<p>ウスゲオオバナミズキンバイは本種と亜種関係にあり、最もよく似ている。琵琶湖水系で繁茂しているのはウスゲ型であるが、両亜種の生態はほとんど同一であるため、ともに広義のオオバナミズキンバイの名で呼ばれることが多い。</p>

➤被害

被害状況	<p>強い繁殖力のため、在来植物と競争する。また、水田への侵入による農業被害がある他、開放水域で繁茂すると日光を遮るため、水生動物の生息環境の悪化が考えられる。</p>
[被害対象]	<input checked="" type="checkbox"/> 生態系被害 <input type="checkbox"/> 農林水産業被害 <input type="checkbox"/> 人身・健康被害 <input type="checkbox"/> 生活被害
[影響内容]	<input type="checkbox"/> 上位捕食者となる <input checked="" type="checkbox"/> 植生への影響 <input checked="" type="checkbox"/> 競合・駆逐 <input type="checkbox"/> 遺伝子かく乱 <input type="checkbox"/> 在来種への病気・寄生虫の媒介 <input type="checkbox"/> 土壌・環境攪乱 <input checked="" type="checkbox"/> 希少種・固有種への影響

[性質特性]	<input checked="" type="checkbox"/> 定着性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 環境適応性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 繁殖能力が高い <input checked="" type="checkbox"/> 拡散能力が高い
[被害程度]	<input checked="" type="checkbox"/> 対策の緊急性が高い <input checked="" type="checkbox"/> 被害が大きい <input type="checkbox"/> 特殊性 <input type="checkbox"/> 回復困難性

➤対策

必要な防除対策	多年草のため抜き取り除去が中心になるが、茎の断片からも再生する能力があるため、慎重かつ丁寧に行う必要がある。すなわち、下流部に流失防止のネットを張り、作業後にそれを回収すること、抜き取り時に地下部にある茎や根を見逃さないこと。茎部が地表や地下部に残ると、すぐに再生するおそれがある。
---------	---

➤事例紹介

事例 9 : 京都市

令和元年から、京都府と地元団体が協働してオオバナミズキンバイの駆除活動に取り組んできたが、根絶には至っていなかった。また、活動場所である鴨川は多くの府民に利用されているが、オオバナミズキンバイを含む外来生物の現状については十分に知られていない。このため、地域での継続的な活動につなげるべく、外来生物の現状や防除手法を改めて周知したいとの依頼が地元団体からあった。

講習会では、琵琶湖において先進的にオオバナミズキンバイ対策を進めている滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課を講師に招き、当該種の生態や被害に関する座学のほか、抜き取り¹⁴による防除実習を行った。当日は、オオバナミズキンバイの抜き取り作業が初めての参加者も多く、実習を通して防除には多くの人手が必要であることを実感する機会となった。また、地元企業も参加し、講習会後にはオオバナミズキンバイの生態と防除手法に関する啓発動画の作成に協力をいただくこととなった。

¹⁴ 多年草であるため、抜き取りによる除去が基本となる。作業は、開花・結実期である6～10月より前に実施することが望ましい。また、葉や茎の切れ端からでも再生するため、作業時には飛散や茎の取り残しが生じないように十分に注意する必要がある。人力による駆除のほか、機械を用いた駆除や遮光シートを活用した手法も存在する。詳細については、琵琶湖外来水生植物対策協議会による資料 (https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/oobana_nagae.pdf) を参照。

開催場所 京都市下京区鴨川
活動主体 鴨川を美しくする会
一般社団法人鴨川流域ネットワーク
協力者 京都府
講師 滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課
参加者 地元団体、大学生ボランティア、
地元企業、行政担当者など 138 名
効果 継続した防除の必要性を周知する
開催後 地元企業の支援



駆除活動の様子



駆除したオオバナミズキンバイ

(7) ブルーギル (*Lepomis macrochirus*)

➤基礎データ

目科名	スズキ目サンフィッシュ科	
府カテゴリー・タイプ	被害甚大種・Aa	
環境省カテゴリー	特定外来生物	
原産地	北米東部	
導入・侵入年代	1960年。産業対照種として水産研究機関により各地に移殖。	
分布範囲	<p>全国：ほぼ全国的に分布。 府内：主要な河川の止水域、農業水路、道路に近いため池ならどこでも見られる。</p>	
特記事項	<p><input type="checkbox"/>世界の侵略的外来種ワースト 100 <input checked="" type="checkbox"/>日本の侵略的外来種ワースト 100 <input checked="" type="checkbox"/>特定外来生物（外来生物法）</p>	

➤生態

生態的特性	池沼、河川下流域の流れの緩やかな場所で、水草が繁茂するような砂泥底の水面近くを泳ぐ。雑食性であるが、魚卵や稚魚も食べる。産卵期は6～8月、オオクチバスより1ヶ月ほど遅れる。オスは、浅い砂礫底に産卵床を作り、卵・稚仔を保護する。1回あたりの産卵数は2万～6万。府内への侵入の主な理由は、オオクチバスとのセット放流、京都疎水と宇治川水系を通じた拡散と考えられる。
近似種との見分方	オオクチバスやコクチバスとは、より体が小さくて平べったく、眼状暗色斑を備えることで区別できる。在来種のおやニラミとは生息場所が異なる。おやニラミは、河川の中流域で多少とも流れがあるところに生息する。

➤被害

被害状況	産卵期が在来魚と重なるため、ブルーギル稚魚による卵仔稚への食害、動物プランクトン餌量の独占などにより、在来魚は繁殖阻害されていると思われる。特に池沼など小規模な閉鎖水域に侵入すると、タナゴ類、モロコ類、メダカなどの小型の在来種が絶滅することが多い。このような現象は、府内のどの池沼においても見られるものと考えられる。
------	--

[被害対象]	■生態系被害 ■農林水産業被害 □人身・健康被害 □生活被害
[影響内容]	□上位捕食者となる □植生への影響 ■競合・駆逐 □遺伝子かく乱 □在来種への病気・寄生虫の媒介 □土壌・環境攪乱 ■希少種・固有種への影響
[性質特性]	■定着性が高い ■環境適応性が高い ■繁殖能力が高い □拡散能力が高い
[被害程度]	■対策の緊急性が高い ■被害が大きい □特殊性 ■回復困難性

➤対策

必要な防除対策	仔稚魚をまとめて採集するほか、ため池など規模の小さい水域では、かいぼりや水干しが有効である。大きな水域においては、産卵床破壊による繁殖の阻害が効果的である。特に、繁殖期に個体を重点的に駆除することが重要となる。また、地域に根ざした継続的な取り組みが不可欠であり、市民を主体とした駆除体制の構築が望まれる。深泥池では、かご網を用いた駆除が継続的に行われている。
---------	---

➤事例紹介

事例 10：京都市

周辺地域には希少な動植物が生息・生育しており、多くの保全団体が活動している。しかし近年、ブルーギルをはじめとした外来生物の侵入が増加しており、防除を実施したいとの依頼が地元団体から寄せられた。

講習会では、深泥池水生生物研究会および京淀川漁業協同組合の組合員を講師として招き、ブルーギルの生態や被害について解説した後、釣り¹⁵ともんどり¹⁶を用いた防除実習を

¹⁵ 水深、流れの有無、周辺の障害物に左右されずに実施できる防除方法。活性の高い春から秋に適しており、啓発活動としても有効。京都府の事例では、餌として講習会前に捕獲したアメリカザリガニの腹部を使用し、竿は周囲の樹木に干渉しない長さとして3mのものを用いた。また、防除人数や作業時間を一定とすることで、単位努力量当たりの漁獲量（CPUE）を算出でき、生息数の増減を把握する指標として活用できる。

¹⁶ 流れが緩やかで障害物の少ない場所で有効で、採捕者の技量に依存しない。活性の高い春から秋に適している。多くの漁具店で比較的安価に購入できるほか、ブルーギルは障害物周辺に集まる性質があるため、餌（市販のコイ用練り餌）を入れなくても捕獲が可能である。京都府の事例では、餌を入れずに回収の2時間前に設置した。さらに、設置基数や設置時間を一定とすることで、釣りと同様にCPUEを算出することができ、生息数の変動を把握する上で有用である。その他、投網、電気ショッカー、水抜きによる捕獲など複数の方法があり、環境条件や実施主体の体制に応じて使い分けことが望ましい。詳細は、国土交通省「河川における外来魚対策事例集」（https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/kankyo/gairai/pdf/jirei00.pdf）を参照。



行った。約2時間の活動で、ブルーギル 58 匹、オオクチバス 2 匹を捕獲し、防除手法としての有効性と高い生息密度を実感する機会となった。

また、講習会には、地元で活動する京都府立洛西高等学校「洛再 Links」が参加した。参加した生徒からは、「身近に外来生物がいることが分かった」、「放流が侵入の原因の一つであることを初めて知った」などの感想が寄せられ、次世代を担う若い世代が地域における外来生物問題を考える契機となった。

開催場所	京都市左京区大原野
活動主体	乙訓の自然を守る会
協力者	大原野土地改良区
講師	深泥池水生生物研究会 京淀川漁協組合 組合員
参加者	京都府立洛西高等学校洛再 Links など 16 名
効果	地域の外来生物の状況を知る



講習会の様子

3 参考文献

- ・アカミミガメ防除の手引き〔環境省〕
(https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/r_akamimi_tebiki.pdf)
- ・アメリカザリガニ対策の手引き〔環境省〕
(https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/r_amezari_tebiki2.pdf)
- ・アルゼンチンアリ防除の手引き〔環境省〕
(https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/manual_argentine.pdf)
- ・オオバナミズキンバイおよびナガエツルノゲイトウの防除の手引き
〔琵琶湖外来水生植物対策協議会〕
(https://www.env.go.jp/nature/intro/3control/files/oobana_nagae.pdf)
- ・河川における外来魚対策の事例集〔国土交通省〕
(https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/kankyo/gairai/pdf/jirei00.pdf)
- ・京都府外来種データブック（2020）〔京都府〕
(<https://www.pref.kyoto.jp/gairai/databook2020.html>)
- ・侵入生物データベース〔国立環境研究所〕
(<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/>)

外来生物対策事例集
～京都府地域と連携した外来生物対策推進事業～

令和8年3月

発行者：京都府総合政策環境部自然環境保全課